6月27日～29日

九州 震災対応・♨まち

益城町　黒川温泉

熊本県　黒川温泉

茅葺屋根の電話ボックス

統一感のある案内看板

移植した樹木が風情を生み出している

渓谷沿いに中小規模の和風旅館が並び、建物の色彩、形状に配慮されていて温泉情緒満点である。中心広場として観光旅館組合兼観光案内所の「風の舎」という和風の建物にも風情がある。

どの旅館の露天風呂にも自由に入れるという黒川温泉は、日本の大多数の観光客が求める温泉地であり、急成長した理由であると思われた。

横田　孝穂

観光旅館協同組合の組合長である北里有紀さんから説明をいただいた。失礼ながら組合長にしては若い女性であったが、黒川温泉に誇りを持った毅然とした説明に、爽やかで未来を感じる時間であった。

入湯手形を発行して、各施設の露天風呂に自由に入れる制度を導入し、環境保全上の適正規模を見出しつつホスピタリティをもって温泉を心から楽しんでもらえるよう考えていた。

太田　伸子

山あいの中に静かな温泉旅館がたたずみ、派手な建物がなく、落ち着きのある旅館が目立つ。自治会・住民・観光協会・旅館組合が一体となり、街づくり協定をし、地域理念「地域一旅館」「道は廊下」を合言葉に、時間をかけ樹木を移植し、緑あふれる景観が風情を生み出す大きな魅力となっていた。

太田　正治

大分県　由布院

古民家を移築したコテージ

観光案内所２階にある旅図書

無電柱化された通り

観光資源が乏しいためリピーターになりにくい。年間３９０万人中、年10回ほど訪れる「ハードリピーター」は10％。その多くは女性グループや夫婦で60代以上。観光として成り立たせるには佇まいしかないとの認識。

ＤＭＯ立ち上げにも資金不足で苦慮している。現在、行政も含め観光財源の勉強会をしている。当村は６カ月という短期間だが、３年もの時間をかけて方向性を導き出すとのことだ。

伊藤　まゆみ

和みの黒川温泉から憧れの由布院温泉へ移動。真っ先に目にしたのは、無秩序な商店街と大勢のインバウンド観光客、「エー！」と声を挙げそうになったのを押し止めた。

環境と景観を大切にしながら地域活力を引き出し、癒しの里、安らぎを商品にした品位のある由布院まち、その面影が？

今後も続くインバウンドに、どの様に対処するか見守りたい。頑張れ、由布院観光協会！

加藤　亮輔

由布岳山麓の静かな環境の中に、広葉樹林に抱かれるように温泉宿が点在していた。近くには美術館や、昔のフィルムを上映するシネマスタジオ、おしゃれなカフェ等もあり、滞在者に対する心配りも感じた。

しかし近年は白馬と同様に、外部資本との適切な対応についての悩みも課題として抱えているようだ。

田中　榮一